

# 月刊 **みんぱく** 8月号 2025

特集

## 人形の力

ヒトガタ

巻頭エッセイ 福島 泰樹

# 鞆の浦まで

福島 泰樹

歌人・住職

プロフィール  
1943年東京都生まれ。歌集『バリケード・一九六六年二月』でデビュー。「短歌絶叫コンサート」を創出。国内外1900ステージをこなす。『福島泰樹全歌集』、評論集『追憶の風景』など著作多数。毎月10日、吉祥寺「曼荼羅」での月例「短歌絶叫コンサート」40周年を記念し、クエストよりDVD「遙かなる友へ」を刊行。

## 昭

和十八年三月、私は上野のガード沿いの大原病院で左股関節を脱臼して生まれ落ちた。

翌十九年三月、母は私を産んだ同じベッドで死んでいった。二十六歳だった。一歳で母と死に別れた私の幼児期の記憶の多くは、祖母に背負われて眺めた、背中からの風景である。

昭和二十年三月十日、一夜で十万人が虐殺された史上最大のジェノサイド（五ヶ月後、原爆投下によって塗り替えられる）東京大空襲も、猛火を逃げ惑う祖母に庇護されていた。

私の最初の記憶は、疎開先の出雲。私は祖母に背負われて、いちめん広がる青田を眺めていた。敗戦を目前にした二十年七月、二歳と四ヶ月の記憶である。

それにしてもと思う。空襲警報飛び交い列車が狙い撃ちされる中、乳飲み子を抱いての出雲行きは困難を極めたことであろう。ミルクはもとより食糧欠乏の戦時、祖母はどのようにして、私を育ててくれたのだろうか。

やがて焼跡にバラックが建ち寺は復興した。祖母は、焼跡を耕し胡瓜や茄子や枝豆を黙々と栽培した。畑の四囲に廻らした玉蜀黍が稔り、皇太子が成婚した年の夏、祖母は逝去した。七十七歳だった。

父が遺した過去帳には、旧姓平田つよ、明治十五年、広島県沼隈郡能登原、正瑞寺に生まれるとある。三歳で母を、十二歳で父を喪くし寺を出された祖母は、親戚を転々とし、やがて上野で住職をする兄を頼って上京、その縁で下谷の祖父の寺へ嫁いできたのだ。

以後、祖母の頭上を関東大震災、満州事変、日中太平洋戦争と戦争の嵐が吹き荒れていった。幼年時を私は、祖母の膝と背中を過し、夜は抱かれて眠った。終生、おっとりした備後弁の抜けない人であった。しかし、その体温の温もりの中で、時に淋しくしびいてくる嘆息を聞いたこともあった。いま思えば、それは、時代の波濤に翻弄され続けた女の悲憤であつたのかもしれない。

八十を過ぎ、時間に余裕ができたことも手伝ってか、祖母をつよく想うようになった。能登原とは、どんなところだろうか。むかし、沼隈郡。いまは、福山市に合併されて沼隈町能登原。よし、行こう！新幹線福山下車、タクシーで一路能登原に向かう。山間の村の小高い一廓に正瑞寺はあつた。本堂裏手の墓地に祖母の両親、私の曾祖父父母の墓はあつた。祖母誕生から百四十一年……。山と山との間、光の雨に海が煙っている。山の向こうは名勝鞆の浦である。

## 月刊 みんぱく

2025年 8月号

### 表紙

あやつり人形(修行者)  
(ミャンマー、H0144567)  
伝統芸能ヨウテュー・フェーとよばれる人形芝居用の人形。首や腰、手足の関節が自由に動くように作られている

\*本文中、撮影者・提供者を記載していない写真は執筆者の撮影・提供によるものです。

\*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

- 1 巻頭エッセイ  
鞆の浦まで  
福島 泰樹  
ヒトガタ  
特集 **人形の力**
- 2 性根が彫り込まれた文楽人形  
菱田 雅之
- 4 不完全さゆえに共感をよぶ機械  
アスル・ケミクスイズ
- 6 人形の「死」とどう向き合うか  
菊地 浩平
- 8 ヒジャブを巻いたバービー人形  
黒田 賢治
- 10 みんぱくの人形たち
- 12 みんぱく回覧板
- 14 推しコレ図鑑  
ペルー式のグルグルで、頭もグルグル  
佐藤 吉文
- 16 もっと、みんぱく  
企画者泣かせの特別展示場  
寺村 裕史
- 17 世界の「乗っちゃえ！」  
森林鉄道に人が乗る風景  
岩佐 光広
- 18 だって調査だもの  
移民が作り上げたこの国で  
碓 陽子
- 20 ばくっ!とフィルめし  
カシの木が肉をくれる  
土谷 輪
- 21 今月号の地図・編集後記

ヒトガタ

# 人形の力

ヒトガタは人の形をしたモノなのか？  
人の似姿を得た途端、  
人が、カミが、精霊がいのちを得て  
動き、舞い、語りはじめる。  
人形ゆえの人らしさ。人の創造性よ、もっと！

文楽人形の首(かしら)を製作する筆者(大阪府、2024年)  
(写真はすべて株式会社雅舎提供)

## 性根が彫り込まれた 文楽人形

菱田 雅之

人形細工師

大きくなった人形たち

江戸時代初期に始まる人形浄瑠璃は、劇作家の近松門左衛門が浄瑠璃語りの竹本義太夫に考案させた義太夫節と、操り人形を用いた芝居を組み合わせた演劇である。江戸時代後期には、二〇を超える座が興行をおこなっていた。なかでも文楽座は隆盛を極め、その座名から文楽人形の呼び名が生まれた。

初期の人形浄瑠璃では、寺社の境内に幕を引き、その下から人形を突き出して一人で遣っていた。大きさは、今の文楽人形の三分の一程

度であった。その後、より大きな劇場へと興行の場は移っていった。それとともに、観客によく見えるように、人形のサイズも大きくなった。約四〇〇年のあいだに、四、五回は人形のサイズと仕組みが進化した。多彩な表現ができるように、二人で遣う人形、三人で遣う人形が編み出された。

文楽人形が現在の大きさになったのは、昭和二年ごろのことである。太平洋戦争末期の大阪大空襲で、宗右衛門町にあった松竹の倉庫が燃え、舞台用具とともに数多くの人形が焼失した。戦後、人形を新打ちする機会に、操れる最大のサイズを人形細工師と人形遣者で考えたのだと、師匠である四世大江巳之助から聞いた。

### 舞台役者を作る

数々の名人が工房を構えた明治時代以降、数多の細工が発明された。師匠からも、同じく人形細工師だった親父(菱田宏治)からも、よくこう言われた。「お前は大変やな。一人になるんやから、得意不得意を言えん。過去すべての人形を理解して、製作や修繕をせなあかん。それに加えて、新しい時代



口あき文七の裸人形。口あき文七は文楽を代表する主役級の首。1体の人形を「主遣い」「左遣い」「足遣い」の3人で遣う「三人遣い」で動かす。人形の大きさは性別や身分などによって異なるが、約130~150センチメートル、重さは約3~10キログラムにおよぶものもある(大阪府、2016年)

に通用するものを考えなあかん。これは偉い事になったと思った。修業時代は、寝る間もあまりなかった。

文楽人形は、飾られるだけの人形とはちがう。人形遣者の芸によって、舞台上で喜怒哀楽を表現できる「役者」でなければならぬ。時代物・世話物・ケレン物など多くのジャンルに分かれ、皇族から侍、町人から獣や妖怪まで、役の種類は星の数ほどある。時代考証から身分考証、髪型からキオイ(文楽人形の化粧)、衣装や小道具まで、きちんと整えなくてはならず、自分勝手には作れない。

### 手は目ほどに物を言う

文楽人形の首(かしら)には、「性根」を彫り込む。表情を綺麗にしすぎたり、形だけを考えて彫ったりしてはいけない。性根とは性格(キャラクター)のようなものと考えてよいだろう。「性根の腐ったやつ」や「病

気は治るが腐った性根は治らん」などとむかしはよく耳にしたが、その性根と同じだ。演出と首割(キャストイング)において、性根は何より大事なものだ。

代表的な首(かしら)の性根を挙げてみよう。文七の性根は苦悩である。時代物の検非違使は勝気・正直者、世話物の源太は優柔不断を性根としている。娘は爛漫、老女方は情、孔明は賢者、世話物の検非違使は老獪、新造は悲恋、大団七は豪傑など、首(かしら)には必ず造形として性根が彫り込まれていなければならない。検非違使となると六種類もの性根があり、彫り分けるのがいちばん難しい首(かしら)だ。

手と足にも性根がある。特に文楽人形の手の種類は、本当にたくさんある。人形浄瑠璃の世界では、手は目ほどに物を言うという格言がある。首(かしら)に合わせて、首(かしら)だけで表現できないところを、手が表現している。手の種類と表現の巧みさでは、操り人形のなかでも文楽人形がいちばんだと思ふ。

文楽を鑑賞するときには、首(かしら)はもちろん、ぜひ手の動きに注目して文楽人形を見てほしい。

玉手御前(たまてごぜん)  
首は老女。口針で袂をくわえる



お園(おその)  
首は娘。手は親指以外の4本の指がそろって動く「もみじ手」



三番叟(さんぼそう)  
首は検非違使。端正な目鼻立ちと真一文字の口



# 不完全さゆえに共感をよぶ機械

アスル・ケミクスサイズ 独立研究者

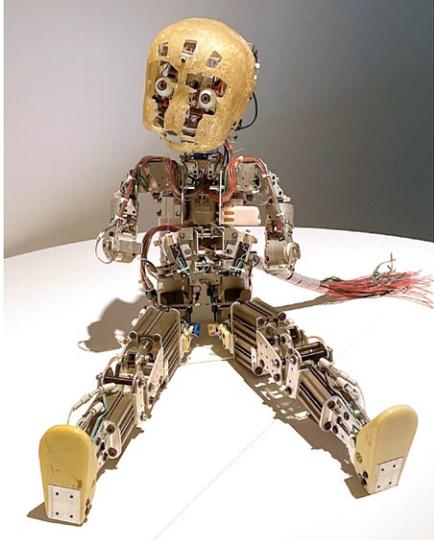
ロボットのとらえがたさ

SFでは、ロボットは「人間のような機械」だと考えられてきた。しかし、「人間のような」と「機械」がそれぞれ何を指すのかは、場合によって大きく異なる。フィクションのなかでは、実験室で培養された



修理を待つ実験室のロボット(大阪府、2018年)

たとえ人型をしていても、あまりにも機械的だからだ。日本科学未来館のアンドロイドは、来館者とやりとりをしていた。しかし、小さな子どもたちでさえ、大人が操作していると気づいていて、見た目が人間そっくりでも人間のように感じないと感じていた。対照的に、中華料理店の入り口で客を迎えるロボットは、スイッチが切られていると



右:子ども型ロボット「アフエット」  
左:レオナルド・ダ・ヴィンチのアンドロイド  
(どちらも大阪大学の浅田稔研究室によるプロジェクト、日本、2022年)



生物学上の人間も、巨大な機械のスーツも、ロボットとよばれる(『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』と『新世紀エヴァンゲリオン』を考えてみてほしい)。ロボットをどのように思い描くべきかに、ルールなどない。それぞれの社会文化的コンテクストにおいて、人びとが共有する理解のパターンがあるだけだ。

人間のような機械を作るといふ課題に研究者が取り組む場合には、ロボット開発の指針となるルールを明確にしなくてはならない。それでも、ロボットとよばれる機械の範囲を定めるのは難しく、つねに揺れ動いてしまう。「人型(ヒューマノイド)」ロボットとなると、さらにやっかいだ。というのも、何があるものを「人間のように」するのかという、古くからの問いにかかわるからだ。すべてのロボットが人間のようにではないし、そうでなくてはならないわけでもない。し

きでさえ、未来館のアンドロイドより共感を引き起こしていた。

「人間っぽさ」とは何か?

共感を生み出すのは、ある種の不完全さである。電気コードに引っかかったお掃除ロボットは、人間っぽく感じられる。対して、ちゃんと動かないプリンターや洗濯機ではそうならない。共感を引き起こすには、人間との類似性と動作の不完全さのバランスが必要なのだ。研究者たちは、そのことをわかつたうえで、人間とロボットの相互行為をデザインしている。

あるとき、チャットボット(カスタマーサービズなどで利用される自動会話プログラム)を組み込んだ小型ヒューマノイド二体に、同時に人間の応対をさせる実験に参加したことがある。研究者は、二体いることで会話の失敗を互いにカバーできるのだと教えてくれた。ところが実験では、一体がもう一体に質問をしてしまったり、二体が同時に話してしまったり、不意に二体とも黙り込んでしまったりしていた。人間っぽさを生み出していたのは、むしろこうした不完全さのほうだった。

ようするに、実際にロボットを人間的に



かし、この問いはロボット研究の重要なトピックとして、活発に論じられている。興味深いのは、人間に姿が似ているかどうかだけが問題ではないことだ。人びとの共感を引き起こす、生き生きとした感じが大事なのである。

人型だから人間っぽい?

わたしは、日本のロボット開発について研究している。そのためのフィールドワークの過程で、あらゆる種類のロボットを見てきた。もつとも効率的な産業ロボットが、人間のようにだと認められていることはほとんどなかった(日本のある自動車工場では、産業ロボットは「自動送り」とよばれていた。)

(翻訳・中川理)



右:鎖につながれたお店のロボット。スイッチが切れている(東京都、2019年)  
左:中華料理店の案内ロボット。長靴代わりにビニール袋を「履いて」いる(神奈川県、2019年)



# 人形の「死」とどう向き合うか

菊地 浩平きくち こうへい

早稲田大学 准教授



人形の焼納供養(しょうのうくよう)の様子(和歌山県 八立稲神社[やたちねじんじや]、2018年)

遺された人形たちはどうなる？

二〇二五年一月から三月にかけて、NHKラジオ第二で放送された教養番組「人形は人間のなんなんだ？」の講師を務めた。毎週日曜日の午前六時から四〇分間、わたしが専門とする大衆的な人形文化について淡々と話し続けるのみというシンプルな番組で、当初はそんなものが成立するのかと不安に思っていた。しかし放送が開始されると、全国の老若男女リスナーから手紙やメールが続々寄せられ、番組の記念イベントには一〇〇人以上の来場者があった。

なかでも興味深かったのが、わたしのものに寄せられた手紙やメール、イベント来場者からの声のなかに、自身の所有する人形やぬいぐるみの「死」についての悩みが数多くつづられていたことである。

手元にある大量の人形たちをいつか処分しなければならぬが、どうすればよいか。もし持ち主である自分や家族が死んでしまつたら、遺された人形たちはどうなるのか。遺言でもなければ、あつさり捨てられてしまふかもしれない。でも家族や友人に迷惑はかけたくない。事前に引き取り手を見つけておく？ いっそ自分の棺と一緒に納め

るべき？ いやそれではまるで、亡くなった主君とともに墓に葬られたという殉死や殉葬のようではないか……。

## 人形のお葬式

というように人形の「死」を巡る悩みは果てしない。人形を愛好する者にとって永遠の命題なのだそう。確かに、全国津々浦々の神社では年中、人形供養がおこなわれているし、想像以上に多くの人がこの問題の当事者なのかもしれない。

ご存じない方もいるだろうが、人形供養とは簡単にいえば人形のお葬式である。わたしも各地で取材をおこなってきたが、多くの人の思いの詰まった厳肅な儀式だ。人形をわざわざ供養するなんておかしい、ごみとして捨てろという方もいるだろう。わたしは人形文化研究を生業なりわいにしているもの、人形を愛でたり、コレクションしたりという趣味はまるでないため、じつはそうしたドライな見方も理解できる。

## 人生に別れはつきもの

しかしここ最近では、人形の「死」についてあれこれ悩み、人形供養のような儀式を必要とする者たちを他人だと思えなくなってきた。というのわたし自身、二〇二四年末に父を病気で亡くし、新年早々にお葬式をした。お葬式で父の友人や親戚に会い、彼らと悲しみを共有して生前の父について話をする、わずかに前向きな気持ちになった。われわれの人生に別れはつきものがあり、その辛さを長い時間かけて乗り越えるための第一歩として、かつては形式的で退屈にも思えた儀式が、一定の役割を果たし得ることを知った。

もちろん人間と人形のお葬式を同列に語

ることはできない。しかしわたしも以前よりは、人形の「死」を巡る果てしない懊惱あうぼうに、一定の実感をもって寄り添うことができるようになった気がする。きつと供養以外にもさまざまな選択肢があるはずだ。研究者として、これからも人形にまつわる答えのない問いに向き合いながら、その行く末を見守りたい。



NHKラジオ「ころをよむ 人形と人間のあいだ」(2022年10月~12月放送)と「ころをよむ 人形は人間のなんなんだ?」(2025年1月~3月放送)テキスト



イベント時に来場者が持参した人形たちの集合写真(神奈川県 横浜人形の家、2025年)

# ヒジャーブを巻いた バービー人形

くろだ けんじ  
黒田賢治 民博助教

ムスリマ（女性のイスラーム教徒）を象徴的に示すひとつは、その頭部を被うヒジャーブである。一九七〇年代以降、ヒジャーブは世界各地のムスリム社会で顕在化した。しかしヒジャーブを巻いた初のバービー人形が発売されたのは、二〇一七年とわりと最近のことだ。人形のモデルとなったのは、アメリカの女子フエンスングのイブティハージ・ムハンマド選手。彼女は前年のリオデジャネイロ・オリンピックの女子フエンスング競技で、アメリカ初の黒人ムスリマとして銅メダルを獲得した。

## 着せ替え人形は禁止？

イスラームに少し詳しくれば、着せ替え人形の存在を訝しく思うかもしれない。イスラームは多神教の偶像崇拜をおこなうアラブ社会への批判として、厳格な一神教を

唱えて登場した。そのため偶像のように神を他の何かと並べることは「多神教」として、厳格に禁じている。また、神のみならず、神の被造物である人間や動物などの像の作製を預言者ムハンマドが禁じる言行もある。着せ替え人形は、ヒトガタである。とすれば、アメリカはともかく、イスラーム圏でヒトガタの人形は禁じられていそうなのだが、どうなのだろうか。フツラという、バービー人形に似せた着せ替え人形がある。ヒジャーブを

巻くなどイスラーム的な色彩を帯び、北アフリカやエジプト、インドネシアなどで販売された。もともとシリアを拠点に生産していたが、二〇一五年にアラブ首長国連邦（UAE）のドバイに拠点を移し、造形もより洗練された。筆者が専門とするイスラームの分派シーア派の大国のイランでは、フツラはないものの、玩具店に、中国製の着せ替え人形がごく自然にある。では、着せ替え人形がイスラーム圏で何の問題もないのか、というところでもない。

## やはり禁止？

シーア派でイスラーム法学上の問題に非常に影響力のあるイスラーム法学者に、イラク在住のアリー・スィースターニー師がいる。師は人間や動物に似せた像、また女

性の裸像や半裸像の作製の可否を信徒から尋ねられ、それへの法見解を出した。それによれば、後者は不道徳性を引き起こす場合、明確に禁じられる。他方、前者は、義務的な予防措置として、それらの作製も禁じられる。つまり彼の法見解では、通常のフィギュアを性的に改造した魔改造フィギュアはもちろん、着せ替え人形も禁じられる。だが、師に従うイランの信徒は着せ替え人形を倫理的に手にできないのかというところ、そうではない。人間や動物に似せた像の作製に対しては、義務的な予防措置の条件を付しているからである。

義務的な予防措置とは、当人が法見解を示す際に確証には至っておらず、他の高位のイスラーム法学者の見解に従うことができる範疇を指す。つまり師の信徒は、例えば、

イランの現最高指導者でもあるイスラーム法学者アアリー・ハーメネイー師のように、それらを禁じていない高位のイスラーム法学者の見解に従うことで、倫理的に抵触することなく着せ替え人形を購入することができるのである。

この原稿の依頼が来た機会に、せっかくなので、冒頭に述べたイブティハージ・ムハンマド選手をモデルとした人形を手に入れようと思った。だが、オンラインショップピングをしようとした瞬間に手が止まった。五万七〇〇〇円……。こんなことならUAEに出かけたときにフツラを買っておけばよかった。

## 五万七〇〇〇円……

右頁：イランの玩具店。中国製の着せ替え人形が並ぶ（イラン テヘラン市、2025年）

上：ドバイ土産のI♡DUBAI人形（UAE ドバイ首長国、2019年）  
下：イランのエスニック・マイノリティのトルクメンの着せ替え人形（イラン テヘラン市、2025年）



コーランを朗唱するヒトガタ玩具はベストセラーらしい（インドネシア スラバヤ市、2024年）

# ヒトガタ みんなの 人形たち



4

## 専用の足置きクッションまで

**ビーズ製人形** アフリカ展示場  
ヨルバのビーズ職人により技術の粋を集めて作られた高さ約1.5メートルの世界最大級のビーズ工芸品。人像とともにイスや帽子、ハエはらいなどの装飾品がそろっており、すべてビーズでおわれている  
(ナイジェリア、H0213108~H0213113[セット])



5

## 集まれば にぎやか!

**土人形セット** 南アジア展示場  
彩色された素焼きの土人形。郵便局員や警察官などさまざまな公職の制服姿、水瓶を運ぶ女性、宗教家や宗教に帰依して楽器を演奏する人びとなど26体(インド 西ベンガル州、H0279149)



3

## 職業も顔もさまざま

**コロソ人形(女性、兵士)** アフリカ展示場  
植民地時代の風俗を写した人形。植民者や旅行者向けに制作された。現在でも土産物として人気がある  
(ガーナ、H0204976・H0204946)



1

## まなざしはどこに

**モアイ像(複製)** オセアニア展示場  
モアイはラバヌイの人びとが帰属する親族集団の祖先をあらわしたものとされる。11世紀から16世紀ころまでに作られた  
(チリ ラバヌイ[イースター]島、H0009519)



6

## 在りし日の故人を偲ぶ

**死者像** 南アジア展示場  
死者や祖霊の弔いのために作られる彫像。特に際立った能力を有していた死者を記念し、遺体とともに置かれる。祝宴が催された後に祀られる(パキスタン、H0327589)



7

## 修行するのだ!

**あやつり人形(修行者)** 東南アジア展示場  
ミャンマーの伝統芸能ヨウテー・フェーとよばれる人形芝居用の人形。種類は数十種類におよび、首や腰、手足の関節が自由に動くように作られている。各部分に結び付けられた糸を人形師がたくみにさばきながらあやつる  
(ミャンマー、H0144567)

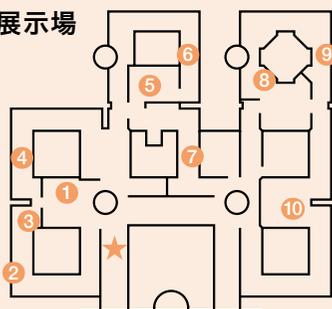


8

## あの世でも立派な家に住めますように

**冥宅** 東アジア展示場(中国地域の文化)  
多くの華僑・華人は、あの世がこの世と同じような世界であると信じている。死者が贅沢な暮らしを送れるよう、紙で作った立派な冥宅を燃やし、あの世に届ける  
(アメリカ 華僑・華人、H0269088)

## 本館展示場



★: 観覧券売場



2

## 赤いチョッキの牧人たちが大移動

**アルプ行列人形** ヨーロッパ展示場  
何十頭ものウシと牧人が夏に村を出発し、秋に村へ帰るスイスのアルプ行列を再現した人形  
(スイス、H0092220ほか)



10

## 代わりに痛いのがマンしてね

**わら人形** 東アジア展示場(日本の文化)  
シンプルな素材と形のヒトガタ。わら人形を樹木に釘で打ち付ける「丑の刻まいる」は浄瑠璃の「蟬丸(せみまる)」などにみえ、江戸時代にひろくおこなわれた  
(日本 愛知県、H0036686・H0036687)



9

## 精霊よ! 我に力を!

**シャーマン用精霊人形** 中央・北アジア展示場  
シャーマンが儀礼の際、人形を先祖のシャーマンの霊に見立てて祭壇に置く  
(モンゴル、H0277278)

# みんなく 回覧板

## イベントの詳細・予約はこちら

みんなくホームページ  
催し物のご案内  
<https://www.minpaku.ac.jp/event/>



各イベントについて、  
詳しくはホームページを  
ご覧ください。

### 臨時休館のお知らせ

運営上の都合により、8月16日(土)・17日(日)は臨時休館とさせていただきます。

### 特別展

#### 舟と人類

アジア・オセアニアの海の暮らし  
人類史において舟やカヌーの出現とその本格的な利用は、わたしたちホモ・サピエンス以降だといわれています。本特別展では人類史的な視点から、本館が所蔵してきたアジアやオセアニアの海域世界における多様な舟を紹介します。



家船を建造するサマ人の舟大工(マレーシア、1965年、C.セイザー撮影)



航海中のチェチェメニ号(マイクロネシア、1975年、海工房提供)

### 関連イベント

研究公演  
**マオリの伝統芸能カバハカ**  
「カバハカ」の起源は、「ハカ」(戦闘)・両端にポールがついた紐を用いて演じられていた「ポイ」・嘆きの唄「モテアテア」などにあります。植民地化される以前にあった日常的な行為が、今日見られる「カバハカ」へと進展し



ナ・ハウ・エ・ファによるハカの公演風景

▼一般受付  
8月25日(月)～9月24日(水)  
▼友の会先行受付  
8月18日(月)～22日(金) 定員80名  
お申し込み先  
国立民族学博物館友の会  
(千里文化財団)  
▼申込期間  
8月25日(月)～9月24日(水)  
※イベント参加費は不要  
※事前申込制(本人を含む2名まで)、先着順  
※事前申込の方へ、当日12時30分から本館2階会場前にて展示観覧券を確認後、入場していただきます。  
※受付期間中に定員に満たない場合のみ当日参加を受け付けます。

企画展  
**フォルモサアート**  
——台湾の原住民藝術の現在——  
オーストロネシア系先住民族の台湾原住民は、口承や歌謡、衣服や道具の造形をとおして自らの文化を伝えてきました。その営みは現在、大地と大海原の聲(こゑ)を聴き、森羅万象の生命を尊び、美を解放する原住民族アートとしても関心を集めています。伝統の継承を重んじながら、新たな創造の営みに取り組む芸術家たちの作品を紹介します。  
会期 9月18日(木)～12月16日(火)  
会場 本館企画展示場



企画展の準備のため日本・台湾の共同チームが作家の工房を訪問したときの様子(2025年)

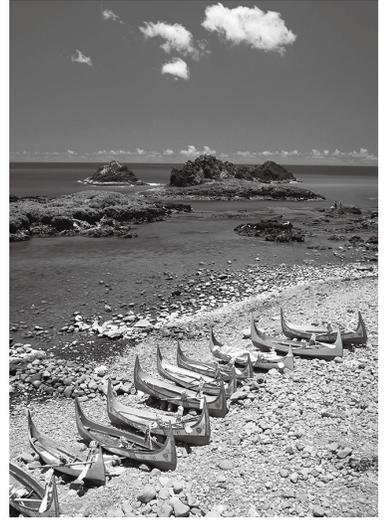
はじめの二歩  
やってみよう！ミラー刺繍  
日時 8月24日(日)11時～16時  
(最終受付15時30分)  
会場 本館1階エントランスホール  
対象 6歳以上(5歳以下は保護者同伴)  
※申込不要、参加無料、当日随時受付  
描き書き@みんなく  
——世界の衣装——  
日時 9月15日(月)祝10時30分～15時30分(最終受付15時)  
会場 本館1階エントランスホール  
※申込不要、参加無料、当日随時受付

「西アフリカのお話し会」の公演  
日時 9月15日(月)祝11時30分～12時、13時30分～14時  
会場 本館1階エントランスホール  
※申込不要、参加無料、当日随時受付

アラビア語がっつぐ  
日本とアラブ世界  
日時 9月21日(日)13時30分～16時10分(開場13時)  
会場 みんなくインテリジェントホール(講堂)  
定員 400名

「演目」  
詩と語劇 大阪大学アラビア語専攻生  
ウード演奏 常味裕司(ウード奏者)  
対談 アリービン・タミム(アラブ)  
タビ・アラビア語センター長  
本田孝一(アラビア書道家)  
※事前申込制、先着順  
※一部アラビア語同時通訳あり  
[申込期間]  
8月4日(月)～9月16日(火)  
お申し込み先  
国立民族学博物館友の会  
(千里文化財団)

海域世界における多様な舟について、展示に触れつつ紹介します。



蘭嶼島の沿岸に並ぶタタラ舟の風景(台湾、1994年、門田修[海工房]撮影)

## みんなくウィークエンド・サロン

本館の研究者が「みんなくの展示資料」調査している地域(国)の最新情報「現在取り組んでいる研究」についてわかりやすくお話しします。

※定員なし(ご自由に参加いただけます)  
※申込不要、要展示観覧券(一般780円、特別展をご覧になる場合は一般1,200円)  
※イベント参加費は不要

9月14日(日)14時30分～15時15分

### 舟の人類史

——移動・漁・信仰——  
話者 小野林太郎(本館 教授)  
会場 本館展示場(ナビひろば)  
人類史において舟やカヌーの出現とその本格的な利用は、わたしたちホモ・サピエンス以降だといわれています。本サロンでは人類史的な視点もふまえつつ、本館が所蔵してきたアジアやオセアニアの

## 本の紹介

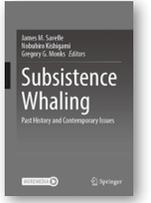
鈴木英明 編  
『移動の文明誌——「自由」と「不自由」の狭間で』  
思文閣出版 9,900円(税込)



本書は、移動に焦点を当て、具体的な移動現象について、関係性を軸に多様な人文系学問から読み解き、かつ、そこにどのような自由と不自由が見えるのかについて考察した論文集です。

James M. Savelle, Nobuhiro Kishigami, Gregory G. Monks 編著

**Subsistence Whaling: Past History and Contemporary Issues**  
Springer 24,892円(税込)



本書は、捕鯨に関する人文・社会科学系の研究動向を論じた論文とともに、ヨーロッパおよび北アメリカ地域における過去と現代の生業捕鯨を、考古学・地理学・文化人類学の視点から考察した論文集です。

## みんなくゼミナール

会場 みんなくインテリジェントホール(講堂)  
参加無料、申込不要(定員400名)  
※8月は休会です。

第560回  
9月20日(土)13時30分～15時(開場13時)

### アジア・オセアニアの舟と人類

——みんなく舟資料からの検討——  
講師 小野林太郎(本館 教授)  
人類史における舟の出現と利用は、わたしたちホモ・サピエンスの誕生以降といわれます。本講演では本館の舟資料よりアジアやオセアニアの舟と人類の歴史や共通性、地域性について考えます。



クラカヌーによる航海の様子(ババアニューギニア、2011年、門田修[海工房]撮影)

## 友の会

講演会・セミナーへのお申し込みは友の会ホームページ内の受付フォームをご利用ください。  
お問い合わせ先 国立民族学博物館友の会(公益財団法人千里文化財団)  
電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716  
E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp [https://www.senri-f.or.jp/minpaku\\_associates/](https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/)



## 友の会講演会

会場：本館2階第5セミナー室(定員70名)  
参加形式：会場もしくはオンライン配信  
友の会会員：無料  
一般(会場参加のみ)：500円  
※事前申込制、先着順  
※会員は会場参加の場合、事前申込不要

第563回 8月2日(土)13時30分～15時  
**激戦地の現在——ソロモン諸島のびとの戦争経験と戦後誌**  
講師 藤井真一(本館 助教)

第564回 9月6日(土)13時30分～15時  
**私のアンデス研究半世紀**  
講師 関雄二(本館 館長)  
1979年に大学院へ進学し、南米アンデス文

明の調査団に参加してから、今年で46年になります。本講演では、調査団の先生や仲間を支えられながら歩んできた、文明研究の道のりを振り返ります。あわせて、調査の過程で遭遇した出来事を契機に取り組むようになった、文化遺産の保存と活用に関する研究と実践についても紹介したいと思います。

## 東京講演会

友の会会員：無料、一般：500円  
※事前申込制、先着順(定員45名)  
※オンライン配信はありません。

第140回 9月28日(日)13時30分～15時  
**ユダヤ・ディアスポラ文化と現代イスラエル国家——そのねじれの深層を読み解く**  
講師 赤尾光春(本館 特任教授)

会場 JICA地球ひろば(JICA市ヶ谷ビル) 後援 JICA地球ひろば  
古代より世界中に離散したユダヤ人は国をもたない民としてユニークな規範意識と文化を築いてきました。本講演では、このようなユダヤ・ディアスポラ文化がイスラエルの建国とその後の歴史的な展開を経る過程で迎ってきた継承と断絶の諸相を、聖地、国家、軍勢力、他者に対する認識と振る舞いなどの関係から読み解きます。

## 夏みんなく友の会キャンペーン2025

期間中、下記いずれかをご利用いただいた方にプレゼントをご用意！  
①友の会LINE公式アカウントに友だち登録  
②正会員もしくはミュージアム会員にご入会  
期間 8月11日(月・祝)まで

### ◆ 押しコレポイント ◆

ウシなどの役畜が回転させる軸棒が押し！これが中央ローラーを回転させサトウキビを搾る。かつてこの回転が作り出した「甘さ」が世界経済も回転させたと思うと感慨深い。



#### 強める Emping

#### 中南米を変えた サトウキビ

Sugarcane changed Latin America

東南アジア原産のサトウキビは、コロンブスによって導入され、17世紀ごろには中南米各地で糖産業が盛んになった。必要な労働力として、アフリカから多数の奴隷が移入された。

#### サトウキビ搾り機

標本番号 | H0229082

地域 | グアテマラ

展示場 | アメリカ



押しコレ図鑑

## ペルー式のグルグルで、頭もグルグル

さとう よしふみ  
佐藤 吉文 東亜大学 准教授

### 300年変わらぬ外観

考古学者には不文律がある。酒に強いことだ。なぜかまわりの考古学者はみな酒好きでよく飲む。ペルーの山中で、さまざまな機会に作業員として仕事をともにしてくれた人びともまた同じだ。だからわたしも調査地ではよく酒を飲んだが、強く印象に残っている酒がひとつある。今から22年前、大学院の先輩の好意で参加させていただいたペルー中南部の山岳地帯アヤクーチョでの調査の折。とある農村で出会った「カニコーラ」である。

ペルーで親しまれるサトウキビ搾汁から作る蒸留酒にカニャツソがある。件の酒のベースだ。コロンブスが第2回航海でサトウキビ栽培をもち込んで以降、製糖業は新大陸で急速に広まった。栽培から加工まで膨大な労働力を要する製糖作業。加工を効率化するためにある機械が開発された。アメリカ展示に鎮座する垂直ローラー式搾り機がそれである。300年変わらぬその外観。カリブ海マルティニク島の生活誌である1722年出版の『仏領アンティル諸島滞在記』（フランスの植物学者ラバ著）の挿絵そっくり。

### サトウはサトウにやられた

三連ローラーにはペルー生まれという説がある。その後、中南米各地に広がり、世界経済の屋台骨を支えた。とすれば、その酒をペ

ルーで飲むことは、中南米の歴史を呑むに等しいとは言い過ぎだろうか。

調査中、作業員である農夫から酒席に招かれた。酒席は主催者のもてなしではじまるが、酒が尽きれば招かれた側が酒やビールを買い求めて謝意をしめし、相手も応じてまた酒を出す。が、現金収入とぼしき地方の農夫と資金に悩む大学院生。そう長くビールでのやりとりは続かない。気づけば不純物も多い安酒カニャツソが手にあった。誰かが言った。ストレートがだめなら、ほれ炭酸飲料（コーラ）で割っとけ。……あ。

村の酒席では酒をひとつの器で回し飲む。ゆえにカニコーラは悪手だった。酔いを醒ますさんと器を手元に留めおけば、早く飲み干せと語る周囲の目……。

翌日目覚めて思うのはいつも同じである。もう飲まねえぞ。



車座になって座り、器に注いだら酒を隣にいる次の飲み手に手渡すペルー式酒席（ペルー プノ州、2008年）

# 企画者泣かせの特別展示場

てらむら ひろふみ  
寺村 裕史 民博 准教授

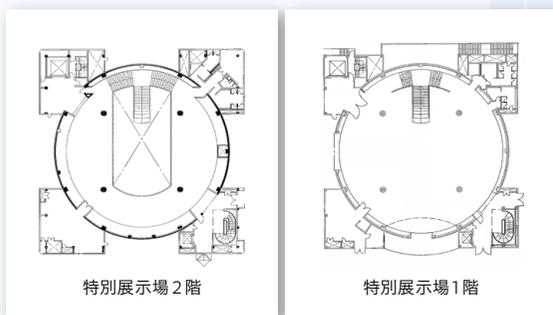
## オシャレな吹き抜け

みんぱくの特別展示館がエモい。前庭の左側に、ビーンと存在感を示している別棟の建物が特別展示館である。展示場内は円形で、一階の面積は八五一平方メートル、中央部分は吹き抜けになっていて、その分二階はやや狭いものの六三九平方

メートルの広さがある。また、一階の正面奥には、二階へ通じる大きな階段が設けられている。一階から幅の広い階段を上って、踊り場で左右に分かれ二階へと至る構造は、まるで明治・大正期の洋館を思い起こさせる。というのはいき過ぎか。

一見、オシャレに感じられる特別展示場の展示空間ではあるが、しかしじつはこの展示場が円形のうえ吹き抜けであるという点はいき過ぎ者で、展示を企画する側（実行委員会）だけでなく、展示デザイナーや施工業者泣かせの建物なのである。

四角い展示ケースや展示台を丸い壁に沿って置くこととする、どうしても背後に無駄なスペースができてしまう。湾曲した壁面に資料をかけて展示するには安定感が悪く、結局平たい演示用パネルなどを丸い壁の前に設置しなければならぬ。二階も吹き抜けの分、展示スペースが限定されてしまう。そのため、展示のレイアウトデザインも工夫が必要であると

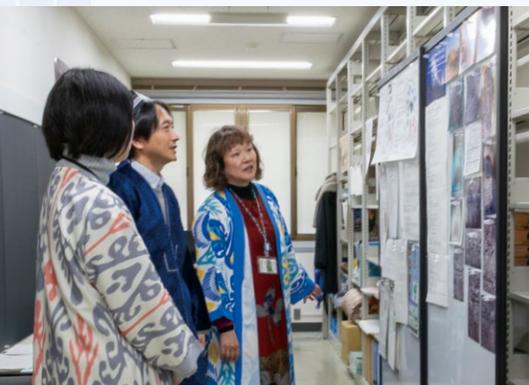


## くせ者とにらめっこ

同時に、施行の手間や工数も増えていく。円形の展示空間は、壁面（と壁際の有効活用という点においては、あまりよろしくないのだ。

じつは、かくいうわたし自身が、シルクロードに関する特別展の実行委員長という重責を担っているのである。二〇二六年三月の開幕予定日までまだ時間はあるものの、すでに頭を悩ます日々が始まっている。

特別展のためのプロジェクト室内には、現地のお土産物を飾ったり、展示候補の資料写真をホワイトボードに貼ったり、展示イメージを膨らませ、あまだこうだと皆で知恵を出し合い、くせ者の展示場の平面図と毎日にならめっこ。数多くの空間的制約をいかにクリアし、良い展示を作り上げていくかが、こちら側の腕の見せどころなのだ。来年三月結末やいかに!?



特別展開催準備のためのプロジェクト室で、展示資料の候補選びや、展示内容について相談している様子。展示のイメージを膨らませる一助として現地の衣装を着てみた(2025年)

# 森林鉄道に人が乗る風景

いわさ みつひろ  
岩佐光広  
高知大学教授

森林鉄道とは木材を運ぶための林業専用の鉄道である。日本では、大半が国有林に敷設された官設・官営のもので、明治末から日本全国の山地を駆けめぐっていた。しかし昭和三〇年代以降、木材の運搬がトラックに全面的に切り替えられ、今では稼働している森林鉄道はない。

森林鉄道に関する文献や資料を読ん



木材を運ぶ魚梁瀬森林鉄道(高知県、大正～昭和初期)

ると、それが「住民の足でもあった」という記述をしばしば目にする。昭和期に秋田県で撮られた写真には、機関車がひく台車に積まれた丸太のうえに、ほっかむりをした女性たちが乗り慣れた感じで座っている。こうした風景は、当時、ありふれたものだったのだろう。森林鉄道は、木材だけでなく人も運んでいたのである。

とはいえ、森林鉄道は木材を運ぶためのものであり、法制度上、旅客運行はできないものだった。にもかかわらず、地域の住民は森林鉄道に乗っていた。それはあくまで目的外の利用である「便乗」だった。

高知県に敷設された魚梁瀬森林鉄道に、昭和二〇～三〇年代に便乗した経験のある人たちと話していて印象深いのが、「ゆっくりだった」と語ることだ。実際、その平均時速は一〇キロメートルほど。ほぼ「マチャリ」と同じスピードだ。ゆっくり走



仁鮎(にぶな)森林鉄道に便乗する地域住民(秋田県、昭和時代)

るその姿は、地域に暮らす老若男女に「乗っちゃえ！」という気持ち掻き立てた。そして実行した。仕事に行ったり親戚に会いに行ったり、祭りに行ったり飲みに行ったり、いろいろな機会に便乗した。魚梁瀬森林鉄道では、便乗が日常化するなかで、本来の目的であるはずの木材を運ばず、客車だけを引いて走る「連絡便」が運行されるようになった。

森林鉄道に人が乗る風景は、森林鉄道が敷設された当初から想定されていたものではなかった。それは、地域の人たちの「乗っちゃえ！」の積み重ねによってありふれたものになったのである。

だって  
調査だもの

# 移民が作り上げたこの国で

いかり  
陽子  
明治大学 専任講師



二〇二五年四月からアメリカ合衆国カリフォルニア州のベイエリアで在外研究している。調査地は調査する場所であると同時に生活する場所

でもある。ところが滞在一カ月が経ったところから、得体の知れない恐れが常にあり、まるで別のアメリカを経験しているようだ。

## 「アメリカがこんな国になるなんて」

新政権が二〇二五年一月に誕生し、アメリカの政治情勢と社会の雰囲気は急激に変化しつつある。生活費を直撃する関税政策よりも、今のわたしのとって気がかりなのは移民政策の行方である。誤送還された移民男性の話や「違法な抗議活動」に関与した留学生、「不法移民」の国外追放など、連日「移民」に対する厳しい取り締まりのニュースが報道されている。わたしの受け入れ先の大学からは、海外渡航を控えるようにと注意喚起のメールが流れてきた。再入国できない事例が報告されているようだ。

近所の男性は十代のころにインドから移民し、航空会社に勤務する。



「私の身体、私の選択」道端に書かれた中絶の権利擁護派のメッセージ (アメリカ パークレー市、2025年)

彼は知り合った初日に、周りを見回し声を潜めて「アメリカは今最悪です。気にせずに自分のことをやるしかない」と助言をくれた。結婚のためにアジアの国から移民し大学のスタッフとして働く女性は、スピード違反などの軽微な罪で学生のビザが取り消されると言い、「アメリカがこんな国になるなんて信じられない」とわたしに話した。滞在許可がいつ剥奪されるともわからないため、移民たちは声も上げられず、不満を身近な人に吐露するのみだ。

最近、これまでにアメリカで知り合った人たちに思いを馳せる。二〇

そして少しほっとする。わたしは歴史の転換を目撃しているのだろうか、今はまだわからない。ただ今は見たり聞いたり経験したことを記録し、写真を撮る。いつの日かノートの内容が日の目を見ることを願って。



「移民がこの国を作った」抗議デモに向かう人たちのプラカード (アメリカ サンフランシスコ市、2025年)

年近く前に知り合ったメキシコ人カールロス(仮名)は気のいい勤勉な男で、今はもう閉店した日本食レストランの洗い場で働いていた。彼は兄弟と一緒にメキシコから自分の足で走って国境を越えて来たと笑いながら話していたが、今はどこに在るだろうか。一九七〇年代にカリフォルニア大学バークレー校のフリースピーチ運動を見に観光客として入ってきたヒロ(仮名)は、そのままアメリカに居着いてしまい、運よくグリーンカード抽選プログラムに当たった。今ではアーティストとして全米をまわっているみたいだ。この国は、研究や教育の現場、レストランの洗い場、さまざまな領域で移民や外国人が一緒になって作り上げてきた。

## 日記アプリがフィールドノート

四月一九日にサンフランシスコの市庁舎前で抗議デモがあると聞き、(周りからは止められたが)見に行くことにした。遠くから見ていると、プラカードを持った女性が「あなたも参加する? 行く?」と聞いてきた。「日本から来た研究者なんです」と答えると、彼女は即座に「行かない方がいね。正しい判断だと思う」と言った。「ここから見えます」と彼女を見送った。フィールドノートを開いて書き込む行為は人目につくので、通りから外れたところで、メールを打つふりをして、見たことや感じたことをスマホの日記アプリに書き込む。

この国の市民ではないわたしは、言ったりやったりしてはいけないことがあるような気がして、自分自身の言動を監視してしまう。そんなとき、声を上げられない人に代わって意思表示をし始める人がいるのを知る。街のふとしたところに誰かの抗議の声が刻まれているのを見つける。

上: 政府効率化省を率いるイーロン・マスク氏に反対するため、彼がCEOをつとめるテスラ社のディーラーには「社会保障を救え」などのメッセージが落書きされている (アメリカ サンフランシスコ市、2025年)

下: 「1775年に王はいらなかった。2025年も王はいらない」。アメリカ独立戦争の開始時と現在を比較した抗議メッセージが電柱に貼られている (アメリカ パークレー市、2025年)



右: サンフランシスコ市庁舎前に集まる人たち  
左: 「民主主義マニフェスト」抗議デモに向かう人たち (どちらもアメリカ サンフランシスコ市、2025年)



## カシの木が肉をくれる

つちや りん  
土谷 輪

京都大学大学院 博士後期課程

スペインの内陸、エストレマドゥーラ自治州という地域がある。この地域では毎年のように冬に向けてブタを肥やす。ここではブタといえばイベリコブタのことを指し、黒い体と長い鼻が特徴だ。

秋にカシの木が実らせたドングリがブタを肥やし、肥えたブタは人びとの手によって屠られる。日の昇らない早朝から一日仕事でソーセージを作る、この行事はマタンサとよばれる。

「ブタを食べるなら、歩く姿まで」という諺がスペインにあるように食べられるのは肉だけではない。心臓や腎臓、蹄、果ては脳まで食べられる。

ある家族のマタンサにわたしは招かれた。2頭のブタを解体してソーセージを作り終えたころ、家族のお母さんが皆に食事を振る舞い始めた。手の空いた者から、食卓に並べられた食べものを食べていく。ブタの耳を刻んでトマトソースで煮込んだものが、お母さんの自慢の一品だ。耳も部位そのものはよく食べられるが、わたしはその料理を食べたことがなかった。そのことを知って、お母さんは味が気に入らないのではないかと心配し、恐る恐る皿を運んできた。

恐る恐る食べてみたが、よく煮込まれた耳は柔らかく、それでいて軟骨の食感が残っており、スープもうま味が効いて大変美味だった。パンをスープに浸して余さずさらえ、「美味しいよ」と感想を伝えた。すると、お母さんは「よかった!!」と、わたしを吹き飛ばさんばかりの勢いでハグをし、満面の笑みでおかわりを勧めた。

腹ごしらえをしたあと、皆で作ったソーセージを熟成させるために天井の梁につるしていく。ソーセージだけではなく、ラードと皮下脂肪、そしてレバーを使ったパテなどもこのときに大量に作られ、来年のマタンサまでの日々の食事やお菓子作りに消費される。

ある古老は「カシの木がわたしたちに肉をくれる」と言った。そうやって、季節とともにまたドングリは実り、ブタは肥え、マタンサの季節がやってくる。



皆で削ぎ落としたブタの肉をミンチにし、パプリカパウダーやコショウなどを混ぜて腸に詰める  
(スペイン エストレマドゥーラ自治州、2023年2月1日)

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館  
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1  
電話 06-6876-2151

発行人 山中由里子  
編集委員 樫永真佐夫(編集長) 河西瑛里子  
黒田賢治 中川理 奈良雅史 松本雄一  
制作・協力 公益財団法人 千里文化財団  
印刷 株式会社 研文社

\*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係  
にお願いします。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆油由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。



## 『月刊みんぱく』は 国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読のほか、友の会会員の方には毎月お届けします。

### 『月刊みんぱく』定期購読

本誌を1年間お届けいたします。年間とおして、いつからでも始められます。



お問い合わせ

### 国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するためにつくられました。本誌送付のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会(千里文化財団)までお問い合わせください。

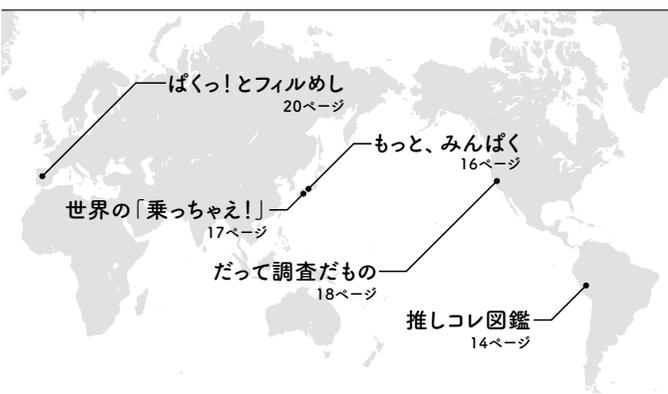
電話 06-6877-8893(平日9:00~17:00)

[https://www.senri-f.or.jp/minpaku\\_associates/](https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/)



友の会

## 今月号の地図



## 編集後記

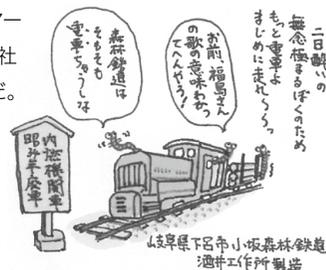
戦後 80 年を迎える本号の「巻頭エッセイ」は福島泰樹さんに、という前々からの願いが叶って本当にうれしかった。まだ赤ん坊だった自分を背負って東京大空襲の戦火を逃れた祖母の故郷、<sup>とも</sup> 駒の浦に足を運ぶまでの自伝語り 80 余年。日本が戦いをやめるころ、ご自身の戦いは始まっていたのだと思った。それゆえ幾千もの鎮魂の挽歌……東京吉祥寺「曼荼羅」で毎月 10 日開催の短歌絶叫ライブは 40 年以上、500 公演を超えた。個人的に好きなのはこの歌。

福島さん口惜しいけれど人生に逆転 KO などありえぬよ

空想のなかの福島さんが「敗者なんかじゃねえよ」と、傷ついたご八郎さんの肩を抱いている。

福島さんも僧なら、本号表紙もミャンマーの修行者だ。ヒトガタは、人が暮らし、社会があるところならどこにでもありそうだ。苦界を生きる人間とは、苦しみの伴侶として人形を求める存在なのだろうか。

改めて平和を。20 年後、戦後 100 年を謳うために。(樫永真佐夫)



## 次号の予告 9月号

## 特集「舟だ! タカラだ!」(仮)

## 国立民族学博物館 National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1 電話 06-6876-2151

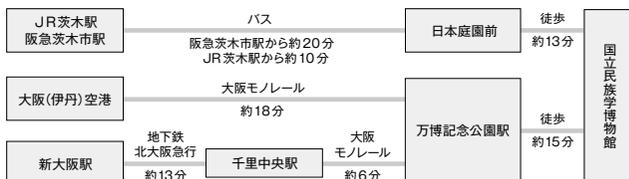
開館時間 10:00~17:00(入館は16:30まで)

休館日 毎週水曜日(水曜日が祝日の場合は直後の平日)  
年末年始(12月28日~1月4日)

観覧料 一般 780円/大学生 340円/高校生以下 無料  
特別展の観覧料金は、その都度、別に定めます。  
※観覧料割引についてはホームページでご確認ください。

### 主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ

<https://www.minpaku.ac.jp/>





最新号

『季刊民族学』193号  
ISBN 978-4-915606-96-0

### 南方戦線の戦後誌 —人びとの経験の多様性から—

2025年はアジア・太平洋戦争の戦後80年を迎える節目の年にあたる。かつて戦場となった地域、とりわけ東南アジアと太平洋諸島地域の人びとは戦後をどのように生きてきたのか。人類学的アプローチで現地の人びとのありようを描き出し、各地域の戦後経験の多様性を浮かびあがらせる。

藤井 真一／長島 怜央／岡野 英之  
下條 尚志／西尾 善太／津田 浩司  
小坂 恵敬／黒崎 岳大／矢野 涼子

連載 野僧記—映像人類学者のオートエスノグラフィ—  
第2回 不揃いの肖像画 川瀬 慈 (ほか)

表紙：戦争遺物を撮影する観光客  
撮影：藤井真一  
A4判・104頁 2025年7月31日刊行



『季刊民族学』192号  
ISBN 978-4-915606-95-3

ダースレイダー [責任編集]  
【特集】ヒップホップ—逆転の哲学

辺境の地でさまざまな言語でヒップホップを武器に闘うラッパーたちの姿に迫る

ダースレイダー／小幡 あゆみ、Mr. 磨 小栗 宏太／キム・ボンヒョン 軽刈田 凡平／矢野原 佑史／村本 茜 (冊談)ダースレイダー×HUNGER (GAGLE)×莊子it (Dos Monos)

(ほか)

191号 ISBN 978-4-915606-94-6

【特集】大阪—野生の都市

190号 ISBN 978-4-915606-93-9

【国立民族学博物館 創設50周年記念 特集】

私たちが歩んだ半世紀

189号 ISBN 978-4-915606-92-2

【特集】先住民のデジタル世界

—ありふれた日常実践と、あらたなる挑戦—

購読方法

国立民族学博物館友の会の維持会員、正会員のみなさまには、年間4冊お届けしております。おためし購入は一般価格：2,750円(税込)、会員価格：2,200円(税込)。郵送の場合は別途発送手数料をご負担ください(会員は不要)。「季刊民族学」は国立民族学博物館ミュージアム・ショップで販売しております。

お問い合わせ

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ  
オンラインショップ「World Wide Bazaar」  
<https://www.senri-f.or.jp/shop/>  
E-mail shop@senri-f.or.jp



オンラインショップ

国立民族学博物館友の会 (公益財団法人 千里文化財団)  
電話 06-6877-8893 (平日9:00~17:00)  
[https://www.senri-f.or.jp/minpaku\\_associates/](https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/)  
E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

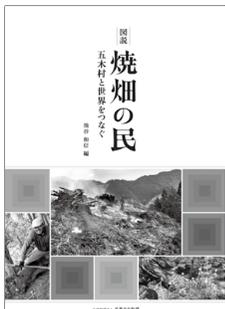


友の会

池谷和信編

B5判 四八頁 才一ルカラー、八八〇円(税込)  
ISBN 978-4-915606-85-4

## 図説 焼畑の民 五木村と世界をつなぐ



焼畑から現代文明を考える  
森林破壊の原因のひとつとされ、世界的には衰退しつつある焼畑。しかし、焼畑をなわいとする人びとは、森の自然回復の過程で変わりゆく植生に応じて多様な資源を利用し、自然と豊かな関係を築いている。「焼畑の民」の暮らしから、わたしたちの生き方を見つめなおす一冊。

中尾勘悟 著  
久保正敏 編著

発売：河出書房新社  
B5判 二八八頁(カラー) 二五五頁(二、九七〇円(税込))  
ISBN 978-4-1309192253 19

## 有明海のウナギは語る 食と生態系の未来

有明海のウナギは語る  
食と生態系の未来



今、ニホンウナギが危ない  
水辺生態系の指標、ニホンウナギの資源減少は、食と生態系の危機を告げる。干潟文化写真家と民族情報学研究者、あわせて一六〇歳を超えるふたりが、有明海を起点に、フィールドワークと文献調査、二色の糸で織りなす、次世代へのメッセージ。「今、私たちに何ができるのか」。

国立民族学博物館友の会機関誌  
『季刊民族学』から、さらなる知の世界へ

公益財団法人 千里文化財団

〒565-8511

大阪府吹田市千里万博公園10-1  
(国立民族学博物館内)

TEL 06-6877-8893  
FAX 06-6878-3716

ご購入はこちら

■国立民族学博物館ミュージアム・ショップ  
email shop@senri-f.or.jp 水曜日定休  
■ミュージアム・ショップ WEB サイト「World Wide Bazaar」  
<https://www.senri-f.or.jp/shop/>

